様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３０１２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２５４１

研究課題名（和文）3歳未満の子どもを育てる母親を対象とした子育て孤立感尺度の開発

研究課題名（英文）Developing a scale to measure isolation experienced by mothers while bringing up children under three

研究代表者
多賀　昌江（Taga, Masae）

北海道文教大学・人間科学部・准教授

研究者番号：２０４３３１３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、3歳以下の子どもを養育する母親が抱く孤立感の様相、その要因と影響を明らかにすること及び母親の支援につなげる尺度を開発することである。今回の研究結果から子育て孤立感が生じる要因には夫婦関係、子どもの体調や発達の不安、自身の葛藤と変化、生活や外出が制限されること、育児ストレスの増大、過労などがあった。相談や話を聴いてくれる相手がいない場合、母親の疲労が強い場合などでは子どもや夫に八当たりしたり、気分が落ち込んだりすることに連鎖する構造となっていた。結果を統合し、3歳以下の子どもを育てる母親の子育て孤立感尺度の原案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
子育ての多くを担っている母親の社会的・心理的な孤立は子育て支援上の課題である。3歳以下の子育て中の母親がどのような場面で心理的に追い詰められ孤立していくのかについて母親の生の声をデータとして収集し、明らかにした点が本研究の特色である。母親が感じる疎外感、誰にも理解してもらえない大変さや子どもの体調・発達の不安が常在することは、第2子以降の子育てをしている母親にも認められる。孤立感の高まりが虐待のリスク向上に関連するため、子育て中の母親を心身ともに早期から支援すること、相談の場や共感の場があること、夫を含む総合的な支援者と母親がつながっていることが孤立感緩和のために必要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify aspects of experienced by mothers while bringing up children under three, its factors and effects, and to develop a scale to provide support to mothers. The results of this study indicate that factors that contribute to feelings of parenting isolation include marital relationships, anxiety about the child's physical condition and development, personal struggles and changes, restrictions on daily life and outings, increased parenting stress, and overwork. In cases where there was no one to consult or listen to the mother, or when the mother was fatigued, the structure was linked to taking it out on the child or husband and feeling depressed. Synthesizing the results, the original draft of this scale was created that to measure isolation experienced by mothers while bringing up children under three.

研究分野：助産学

キーワード：孤立感　産後　子育て支援　母親　虐待予防

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の母親は育児困難感や育児不安が強く、核家族化の急速な進行によって子育て世帯は地域との交流が少なくなっている。そのため、子育ての多くを担っている母親の社会的・心理的な孤立が子育て支援上の課題となっている。心理的に追い詰められ孤立している母親からは社会への SOS が発信されにくい。また、臨床現場では出産後の退院日数が短縮化されている。特に第 1 子を出産した退院直前の母親が「家に帰ってから質問してすぐに答えてくれる人がいない、自分で育てていけるのだろうか」と急に不安を表出する人が増えている。産後 2 週間健診や母乳育児外来などを開設する産科が増えて利用者も多いが、退院後の母親の心理状況は不安が強く、子育ての不安感や心配ごとの相談が非常に多い。

（１）研究の学術的背景

結婚・出産年齢の上昇と少子化の進行によって、母親の子育て不安感・負担感と育児ストレスが増加している。原田らが大阪で行った調査では、親の子育て不安が 20 年前の 3 倍、孤立感が 2 倍、乳幼児を育てる約半数の親が周りからの自分の子育てへの評価が気になるという状況であった（原田ら、2004）。子育て家庭の孤立が育児不安や養育上の混乱を誘発しやすく、虐待につながる可能性が高くなるため、現代の子育て家庭全体として危機状態にある（汐見ら、2008）。地域で孤立する母親と産後うつ病は関連性がみられており、産後うつ病が疑われた母親の割合が平成 25 年度は 9.0%と高かった。母親の孤独感はうつ状態を引き起こす可能性が強い（Matthews et al 2016）が、その全体的な構造は未解明な部分が多い。このような母親の社会的な孤立や孤独感は母親のメンタルヘルスに影響し、子育て不安や子どもへの虐待を引き起こしている（厚生労働省 2014、岡野 2009）。

（２）孤立感と孤独感について

先行研究においては、孤立感と孤独感については明確な区別がされてこなかった。心理的孤立に関する研究は、これまで高齢者や若者を対象とした研究が多く、子育て中の母親を対象とした研究は稀少であった。これまでの研究動向では、「孤独感」と「孤立感」はほぼ同様に扱われてきた。社会的孤立が意味するのは、地域とのつながりがないこと、友人や家族からの孤立など、人的・物理的な孤立の状態である。高齢者を対象とした研究では孤立感が強い人は抑うつ傾向が強いとの結果（西ら、2009）があり、孤独感が強い人とうつ病は関連する（Cacioppo et al,2010）。

子育て中の母親を対象とした「孤独感」についての先行研究では、「社会的なつながりがないこと」「ひとりぼっちであること」（馬場ら、2013）等、母親の立場や相手との関係性のなかでの孤独な思いを示していた。母親の「孤立感」は、「育児の大変さを誰もわかってくれない」「一人で子どもを育てている感じ」（申ら、2015）であった。母親の心理的孤立感については、他人とのつながりや助けがない思い（広辞苑第 5 版）や母親が感じる疎外感、誰にも理解してもらえない大変さなどが主な要素であると考えられ、子育て中に感じる孤立の構成概念を明らかにする必要がある。

２．研究の目的

本研究は 3 歳未満の子どもを育てている母親が子育てに伴って内面で感じている「孤立感」の様相を明らかにし、子育て中の母親が抱いている孤立感（以下、子育て孤立感）を測定する尺度を開発することを目的とする。

３．研究の方法

（１）文献検討及び孤立感に関連する産後うつ病と子どもへの虐待リスクファクターの抽出・母親の孤立感を取り巻く因子と関連要因の構造の明確化を行う。

（２）子育て孤立感を構成する概念と尺度開発に向けた質問項目を抽出するための質的調査の実施。子育て孤立感の様相と孤立感による影響を明らかにするために、①第 1 子が 3 歳以下の子育てをしている母親への調査、②3 歳以下の子どもを含む複数の子どもを育てている母親への調査を実施する。

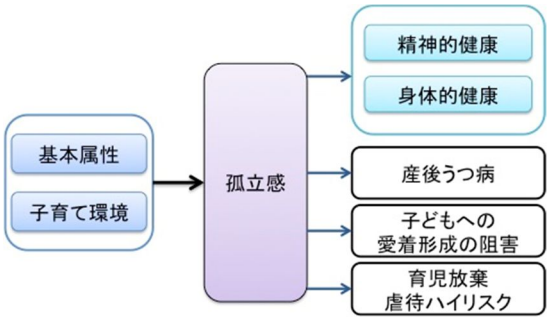
（３）上記の結果から子育て中の母親の孤立感についての構成概念を検討し、3 歳以下の子どもを育てる母親の子育て孤立感尺度原案を作成する。

４．研究成果

乳児期から 3 歳までの幼児前半期は子どもの感情分化が発達し、自己主張が強く人見知りや分離不安などによって養育者のコーピングが高い時期である。そこで、研究開始時は母親が養育する子どもの年齢を 3 歳未満としていたが、本研究では子どもの心身の発育発達が著しい 3

歳以下の子どもを育てる母親を対象とすることに変更した。

（１）3 歳以下の子育てをしている健康な女性のうち、産後うつ病や子どもへの虐待の要因を抽出する目的に日本国内における過去 10 年間（1999 年～2018 年）の文献検討を行った。医中誌 web Ver.5 を用いて文献を検索し、タイトルと要約、内容が条件に合致した原著論文 47 件（38 件が産後うつ病に関する文献、9 件が子ども虐待に関する文献）を抽出した。文献から産後うつ病や子どもへの虐待のリスク因子を精査した結果、主に 13 のリスクファクターが抽出された。それは、１）初産婦であること、２）家族のサポートの欠如、３）経済的困窮、４）妊娠中から強い不安があり妊娠を否定的にとらえていること、５）分娩時にトラブルがあった、６）子育てにストレスを感じている、７）母乳栄養にトラブルがある、８）睡眠の欠如、９）体調の不調や強い倦怠感、１０）子どもの泣きや子どもの気質、１１）母親に孤立感がある、１２）子育て不安を感じている、１３）エジンバラ産後うつ病自己調査票（EPDS）得点が高いこと、であった。この結果から、産後の孤立感は子育ての困難さや虐待とメンタル不調に影響する要因のひとつであることが明らかとなった。そして、文献検討からは母親の孤立感を取り巻く因子と想定される関連要因は、次の図のような構造であることが推察された。



（２）理論的サンプリングとして、「核家族」「拡大家族」「正規雇用者で育児休業中」「正規雇用者で職場復帰後」「非正規雇用で職場復帰後」「専業主婦」「里帰り分娩」「高齢出産」「戸建て居住者」「集合住宅居住者」「常に疲労感がある者」「主観的健康観が高い者」「養育する子どもはひとり」「末子の年齢が 3 歳以下である複数の子どもを育てている」に該当する母親を対象者に含むスノーボールサンプリング式にて対象者に依頼し、半構造化インタビュー調査を実施した。主な質問項目は、3 歳以下の子どもを養育する母親が子育てする生活のなかで生じる孤立感について、その背景と要因および構造およびそれらの感情が生じた結果、家族関係や養育上に起きる影響と孤立感を緩和する要素についてである。

2020 年 2 月に日本で Covid-19 が発生したが、この調査は感染症対策の国家規制が実施される前に実施した。調査は 33 人に実施した。そのうち、条件に該当しなかった 4 名を分析から除外し、29 名(内訳は、第 1 子の子育てをしている母親が 16 名、3 歳以下の子どもを含む複数の子を養育する母親が 13 名)であった。分析方法は、データに基づいた孤立感の構造と行動特性を理論化するために Charmaz(2006)の構成主義的なアプローチ（Construvting Grounded Theory）を用いた。

①第 1 子が 3 歳以下の子育てをしている母親への調査結果

インタビューの参加者は 16 名（双胎 1 人を含む）、全員が既婚でパートナーと同居している核家族が 10 名、親と同居が 1 名であった。参加者のインタビュー時の年齢は 29 歳から 40 歳（平均 35 歳）であった。

②3 歳以下の子どもを含む複数の子どもを育てている母親への調査結果

インタビューの参加者は 13 名、全員が既婚でパートナーと同居している核家族が 11 名、親と同居が 2 名、パートナーと別居している者は 2 名であった。参加者のインタビュー時の年齢は、28 歳から 42 歳（平均 33 歳）であった。

基本属性として、家族形態は 26 名が核家族、3 名が複合家族であった。第 1 子のみを育てる母親と第 2 子以降の複数の子どもを育てる母親に共通していたことは、育児のほとんどを母親が中心に行うことに伴う心身の疲労、支援者の有無と夫からのサポートの有無、子どもの発達の不安、母親の交遊関係が一時的に縮小して外に出られない期間があることで大人と直接的会話がする機会が極端に減少すること、母親としての気持ちの変化などが子育て孤立感を生じる要因となり、それが母親としての自己肯定感を低く捉えていることに関連していた。特に、子どもの養育をほぼ自宅のみ（保育園や幼稚園、子育て支援センターなどに定期的に通わない状態）で行っている場合には、同居家族との関係性や言動が母親の子育てに向き合うときの気持ちに影響し、気持ちが内向的となりやすく、ストレスの度合いにも変化

を及ぼしていた。主観的健康感は、調査対象 29 名のうち「よい」「まあよい」が合わせて 27 名、2 名が「あまりよくない」であった。

（3）調査の結果から母親の孤立感の構造は、夫婦関係、子どもとの生活や発達・体調、自分自身の葛藤と変化、子どもがいることで生活や外出が制限されること等が背景要因となって孤立感を生じ、相談する場や話を聴いてもらえる相手がいない場合や母親の疲労が強い場合などでは子どもや夫にあたってしまったり、気分が落ち込んだりすることに連鎖しているような複数要因が関連しあっている構造となっていた。子育て孤立感は第 1 子の子育て時だけではなく、第 2 子以降の子育てにおいても母親の負担が強い場合には生じていることが明確となった。

以上の結果を統合し、母親の孤立感についての構成概念が明確となったことから 3 歳以下の子どもを育てる母親の子育て孤立感尺度原案を作成した。当初予期しなかった新型コロナウイルス感染症拡大により、尺度の信頼性と妥当性の検証は未実施である。感染拡大前の子育て環境と感染症流行後過去 3 年間の子育て環境は大きく変わった。そのため、子育て中の母親が外に出る機会がさらに減り、感染症に罹患する不安や対人コミュニケーションをリアルに行えないことが子育て中の母親の不安感を増大させている。そして、オンラインを多用した情報提供や相談方法が増えたことなどによって、子育て中の母親たちには新たな不安要素や課題が存在しているのでないかと推測される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Masae Taga
２．発表標題 Incidence and Risk factors of Postpartum Depression and Child
３．学会等名 2020　Taiwan International Nursing Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2020年から2023年にかけて公益財団法人母子衛生研究会が運営する「オンライン版　マタニティひろばハロー赤ちゃん！北海道」「オンライン・マタニティ教室」「ワーキングマタニティスクール」にて、オンライン、対面での母子保健教室（初産婦と夫向けの講座）のなかで本研究成果の一部を紹介した。妊娠期から子育て期において孤立感を抱かない工夫や対処方法についてのアドバイスを説明した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐伯　和子 (Saeki Kazuko) (20264541)	北海道大学・保健科学研究院・名誉教授 (10101)	
研究分担者	鹿内　あずさ (Shikanai Azusa) (50382502)	北海道文教大学・人間科学部・教授 (30121)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関